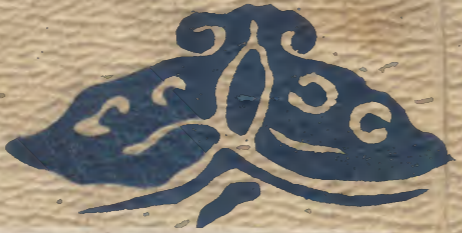


志月里



| | | | |
|-----|---|---|-----|
| 和書門 | | | |
| 冊 | 架 | 函 | 號 |
| 100 | 1 | 1 | 211 |

| | | | |
|------|---|---|-----|
| 庫文門内 | | | |
| 冊 | 架 | 函 | 號 |
| 2 | 1 | 1 | 211 |

(二カ)



二

| | | | |
|------|-----------|-------|--|
| 内閣文庫 | | | |
| 番號 | 和 | 28420 | |
| 冊數 | 100 (2) | | |
| 函號 | 211 | 300 | |



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

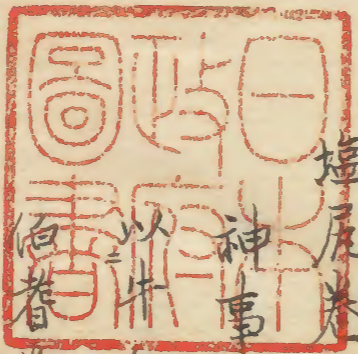


© Kodak, 2007 TM: Kodak





明治十二年購本



塩尻卷之二 元禄

神事之名

以井血昼仙像

酒者卷曰

木門乃落首

光明后乃髮

禍口 野耳

冥加

西瓜

旗檀佛

時日吉凶

山清如美翁刀銘

天皇之称

皇年代略記曰

刀劔乃試

德政

所以

一人出子

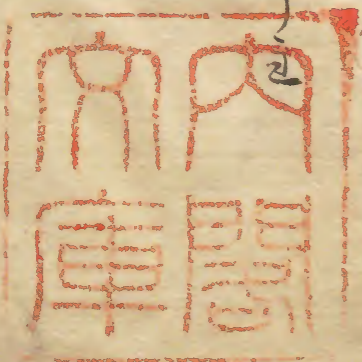
事也

刻名印

九湯彫弓

陰陽家各記名目

天子十表



古

勅書乃紙

三危

朱子通鑑補文

親王乃序次

擗部

大明一統志編輯乃意

正徹秋夕乃序

中内乃官

謝靈運

猿樂

蜜罍

放生

書在氣下乃好

郭云

福祿壽乃經

之水

謎

吾國尚鬼好巫

鞠

今世學問止人

緬鈴

修身齊家

人磨教人あり

光彦代詔乃序

陸秀夫

蠟鼠

聖武帝娶後母韓

兒乃心せし時乃呪

沈氏四女韻譜

樹名之位官と云

右瀧頂神咒經

恙神

朱子山心紀行

書撰法外

人丸乃豫秋

漢書將軍家乃附喪矣あは

江山法民上春山

外言京祚四在乃秘

通鑑綱目用卷才一義

無花果

馬子伊周

糸沙徑四詔あり

河麻氏苗祚 月詔神

陳令翁責沈文

君貴明

古今著述集系

婦人以姬為稱

新良貴乃姓

古唐大明乃大乃字

經書初年乃一代之

元傍柏子唐可憎の語

まゝこ じやまゝのまゝか

妙見

六丁風州天永寺

朱子頽胡氏有館詩

古ト用羊骨

茶乃始

和茶をすてかると云

覆ふ持る和園乃之と成て

明德

文德帝讓位

むねは 亦乃字

尾張國の寺田跡

我國陶器乃始

○國語五魯語云公父文伯之母曰天子及諸侯合

民事於外朝合神事於内朝云々

按神事之名周已有之

○或問本朝号人主称天皇者效春秋以周王書天

王欽曰不然是盖效李唐臣子之詞也按彦範謂

武后曰昔天皇以愛子託陛下亦曰人心久思李

氏群臣不忘太宗天皇之德云々本邦与唐數通

交朝家学唐之制度者多矣

○武后之時僧懷義命殺牛取血昼大佛像置天堂

其首高二百丈云々本朝造大像者聖武天皇鑄

金銅十六丈大佛像作東大寺置之嗚呼天下之

多く出り秋門帰敬儀曰先頭由縁後明性相云々
之介形多し

○福從口生 大方便經

○壁有耳 博阿錄

○冥加 孝衡曰加護有二種一頭加謂現身語讚

印其所作二冥加謂潛垂覆撰不現身語云々

○一人當千 涅槃經

○亭主 楞嚴經曰譬如有客寄宿旅亭暫止便去

終不常住而掌亭人都無所去名為亭主云々

○西瓜 スイカハ 代醉四十四曰五代史契丹破回紇

因得西瓜如中國冬瓜而味甘云々亦丹鉛餘

録にも出りよ々水東日誌曰西瓜自元太祖

征西域始得云々此瓜中子萬粒載作也近

世亦國多あり

○刻名印ハ周廣順二季平章李穀より云々亦蒙

古乃人毫を挽く花押云々事終り寸故々象牙或ハ

本を刻して印して之を輕明録に凡々あり

○翰林學士程鉅夫の瑞像乃碑刻の梅檀佛乃の在

る云々乃せ侍る。嘉祐の瑞像乃像ハ彼瑞像

乃写しありり云々乃於聖安寺ハ安置せし之を輕明録の

十七あり

○九錫彫弓 キウシキテウノニニ 見東遊三十三建保六年六月廿一日之記

是衛府之弓名也今射家者流書九錫杖者非也

○事文類聚前集十二沉頽時日無吉凶辨云吉者
國家將有事于戎祀必先擇時日以定其期是用
備物於有司習儀於禮寺俾臻其慮而戒其誠非
所以定吉凶決勝負也後之惑者不詳其故推考
時日妄生穿鑿斯風不革拍忌益深云云

○泰山府君祭 西岳真人鎮 百怪鎮

日曜 月曜 熒惑 太白 計都

大歲八神 大將軍 七十二星等之祭

五龍祭 三万六千神祭 夙伯祭

雷神祭 地震祭 鬼氣祭 靈氣祭

咒詛祭 道斷祭 驚祭 太一定分厄被

灵所祭 天鎮祭 地鎮祭 宅鎮

厩鎮 井灵祭 王相祭 四境祭

大土公祭 小土公祭 招魂祭 身固

反閉

此等皆陰陽家所為也今世神社之祠官習之
者多矣嗚呼非禮淫祀之甚也且親民之所行
非鬼私祭何足云焉

○山崎教義翁刀銘

敬帶止戈 忘却起戒

其機如此 惟省厥躬

○天子十書

詔 誥 制 勅 冊 文 諭 書
符 令 檄

吾学編六十五

○ 按禁秘抄 吾國勅書用黃紙是效唐太宗貞觀式
○ 放生乃字列子出佛者放生をいひ
義をきり羅山子これに并せり

○ 三危 詠林

少徳而多寵 才下而位高 無功而厚祿

○ 書を解く人たことを不省其句を逐く解するは
三却くはぬと朱子のあり 學者文字を解
きし書乃たことよく看く解はし
肝要か
亦其事の求めて道理をのみ人あり

論をわきまを知らず大體を知らず徒ら
學問をわきまをわきまに伊勢物語なり乃塩屋といふ事
を寂蓮法師の信を倭成にわきまのきり
も何れせん只富士乃山は信をわきまのきり
おひき置くものもひきき文も信を今
學者がこれをも求めて自の知りしや
いふ物一凡そ人情物を考へる難をいひ
近き道なり蔡邕論衡を宝として秘し
り此も也張竦大玄を記し揚氏と肩を
成りたるや大方何れも好む
人乃すも道に五曲十義よむ

もくもく傳る唐乃代ももは長き仙人とて但病
祕神もて傳る凡此伝来も唐代乃筆とんも
トハたひひりると

列仙全傳六曰邢和璞不知何許人云々唐明
皇開元十二年至都云々一日謂弟子曰且夕
有異容末子等為予設具云々翌日果一人至
身長五尺闊二尺首居其半衣緋執笏鼓髯大
笑云々和璞謂曙曰此上帝戲臣也云々
凡俗記云老人星傳曰元祐間宋哲宗京師有
一老人長終三尺身与首相半秀目豐髯幅巾
野服以下遊於市云々

文會筆錄二十曰謂福星祿鹿壽鶴則以其昼
像或有鹿与鶴也篁墩詞亦云靜攜白鶴抗玄
鹿云々福祿壽老人老人星壽星皆同也

○掃菰カニヒリケランと姓もて掃守連カニヒリケランあり昔海を蟹を掃カニヒリケラン其
を蟹守といひとりて起り侍る清和紀古代中
紀等天忍海人乃のりをもとて姓氏記に振魂命乃四世
と忍人命掃と姓乃始祀ありとて四事本紀に饒
速日命之世乃孫とて侍る雄略天皇乃時掃との
姓をとりて史に人傳る

孝徳天皇乃時掃と連山麻呂及角麻呂より人
た唐新羅亦使せりかし

此姓を好む官と掃部司を定むるに柳掃部乃事
を司ししめぬと掃部氏も形くお淡くしる事
後醍醐天皇元之三月乃臨書に掃部連國弘と
人あり平戸にたり半々ん侍。

予と初之冬乃友阿と海辺に柳事侍とて植亭
乃内夜昼乃くもく多多くて柳の辺
かきもれしるもかけ女侍といひて是侍
し神代乃に海邊に蟹をたしむる
古流拾遺のあをを思ひ合を侍しと赤子乃層
小倉をせしむるものをかきしる言
掃部を中掃部とありて名に蟹をたしかる

訓をを轉じてかきしる

○主水 水をたわらふかかたしと下り乃言して
芳繁集多し多くんかおもわたりと訓して水
取乃にちり終を轉じてとて訓し亦あり
らんしよもとり乃つこと終書にかり

○大明一統志九十卷府一百六十州二百三十四
縣一千一百一十六及邊陲之地四夷之士悉載
之自天順三年至同五年終編輯總裁之官人李
賢彭時呂原与副官纂修催纂謄録之官人凡五
十七人也其意欲使明主世々知祖宗開創之功
以保守之且使天下之士增其聞見廣其知識感

發乎起以輔成政治也豈備一時之廣覽乎実要

○ 無万世之宏規也讀者先當知其規模之大也

○ 謎ハ玉篇カ隠言カシトイフ也秘訓ハ何トクニカシカ
カシテ其事カ有ルカ有ルカトイフカ檢査集カ有ル
ク乃物カ有ルカ有ルカカ好忠

家カシカシカシカシカシカシカシカ
カシカシカシカシカシカシカシカ

右漢ノ督乃家カシカシカシカシカシカ

○ 正徹カニ夕乃カシカシカシカシカ

カシカシカシカシカシカシカシカ
カシカシカシカシカシカシカシカ

○ 大凡 吾國人尚鬼而好巫禱醮符籙無虛取祈

賽以媚鬼神其神者淫祠最多其祭者非礼又甚
矣且郡縣有失神社曰号強附以他名者嗚呼巫

祝欺人貪利世俗舍常信怪以吾邦称神國而不
知神非其神其祭亦為妖道士之妄術誰顧陳留

謝氏之嘲乎

○ 吾難俎曰官宦之尊貴者趙高為中丞相龔澄樞
為内大師然曰中曰内猶所以別為廷臣也云々

按我邦内大臣中納言其始中内之官也後世
皆為廷臣之顯官故昔日撰令之日不載内中

之官

○鞞 韻會居六切說文蹋鞞也徐按蹋鞞以革為圓囊實以毛髮蹇蹋為戲云々

吾邦之鞞中虛也何時之製乎

古今注曰黃帝習兵之勢云々

劉向別錄曰蹇鞞黃帝造以練武士或曰起戰國

穿域蹋鞞注服虔云穿地作鞞室 漢霍去病傳

古今著同集曰蹇鞞之造亦前庭乃壯觀也

文武之器也室之文多矣始於周禮也拾遺納

言乃譜又用明之室之法也始於周禮也

中天竺留支長者云々世記の事也

日蓮名將軍家乃時勢也故いふ事也

張良韓乃為之

○張良韓乃為之讎言を報せんことをいひり也附若運

も子房の跡を述ぶと志いふ事也晋古ひく道不

別裕の伝に官福を失くす却て是志乃為之也

よりいひて張良の志も同一かき温槃経等受乃

補助せりい仙若の賢人たりと思へ通鑑細目謝靈

運有罪誅せしむ事也書法豈淳若くか

西

○今世學問も人あつても學問も西思ひ

を志すも自門の學問も於伐

是に於ていふ事也要む事也淳厚氏の家を建て自

○猿樂乃伎く水を倡優乃魏曲より比す水の紀度ありて
放縱す水の紀度も忘劇殺伐乃あり今の音楽
を猿の水の紀度も亦をありてて古風は音俗耳に
きて漢唐乃散樂として羯鼓箏篋
琴乃胡琴乃夫聖代乃樂音宋邦としても
を告せり况乎我國信雅樂乃風音をきん孔子
乃忘肉香札の謨歎せて乃深矣い人の心
能く也

今世三弦乃水の紀度を淫哇の新も也倡家水を
ちり了る宋邦より同し也謝氏の五雜俎小
凡そ也

○房中乃邪術の緬鈴よりの五雜俎の緬夷を
殺す水の紀度を淫哇の新も也今此緬
鈴金多て造る水の紀度を工人是乃器を制して利を
得る淫夫包女あり是亦知買て淫戲をて風俗を
之に侍る和漢とも季世よりぬる也起りて
道徳の日も成りあり

○五雜俎十二曰今俗磁罍謂之磁罍者盖河南磁
罍罍最多故治名之如銀稱朱提墨稱隄麋之類
也云々

○我朝瓜稱真菜罍罍稱瀬戸物之類同之
○口は脩身齊家を説くは我らに於て

てい喜怒好悪つゝもさ理をぬはらまゝに家人法をとり
不承りて長知を果常に其れを失ひ好曲乃事
多しとより心偏邪に自欺のて談書後海も一塔
乃説話とひりく格知乃考りてんや〜く鸚鵡乃
正傳のをき〜く自満乃思ひりて事我なり〜く城乃
中〜静彦乃い〜ゆ思ひりて事を事付侍りて
自い〜り〜と

○天平勝宝年中有遣唐副使從五位上陸奥介玉
手人磨及山城史生上道人磨者

羅山文集三十七
柳本人磨傳

亦按〜〜羽粟人磨紀人磨〜り人吉吉あり
柳乃知れ人磨よ〜り〜り〜り〜り人丸乃唐

乃の拾遺集別乃記を〜り

あ〜乃〜り〜り〜り〜り〜り

人麻呂乃圖像に小野春高勅を奉て写せ〜りや
烏帽子直衣乃〜り〜り私曰白青乃直衣紋ハハ藤
さり〜り〜り〜り〜り〜り侍り

○青撰法沙我い乃乃

本乃〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り乃乃汁〜り〜り

此奇蹟古今よ〜り〜り〜り〜り〜り
乃筆〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

り道市利一り為兼仁王義経の人の事なり

○二条行幸乃時和弁乃法云ある一光彦仁因彼方の
みかどりて流しなり

等しめや。松乃乃乃乃乃乃乃

かこららるるや乃乃乃乃

題を竹の契選年とらるるなり
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

○兼良公人磨乃賛よ

こころんよ乃乃乃乃乃乃

やんやんやんやんやんやん

乃乃乃乃乃乃

○宋陸秀夫雖勿遠流離中猶日書大學章句以勸

講通鑑讀

嗚呼李宋乃皇統終乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

は乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

○謙倉將軍乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

再の雲一を聖人を一もひも笑を禦
乃道より一侍祠乃末に臣たはむをいふ
と胡氏乃侍も侍彼高宗乃異をん事
宣王乃災よりて力を了た行を備れ
一乃一いつてかりる後乃國ある君たる人乞を
一乃一いつて祀をいつて佛をいつて笑を免せ
人乃一羅整菴乃凡妖孽身を皆滅ぶ乃明
一乃一いつて感一か一いつて感一いつて
理とありらる吳を備一祥をいつて事
一乃一君身を備れ道を明らして紅綱一
侍一乃天豈妖を降らんや夫侍の過を悔ひ善を
一乃一いつて

一乃助をいの事なりと程夫子も言一乃一
事也季世乃巫祝傍尼り利を貪り人を誣く此礼の
祀をす一乃一いつて

○ 蠶と氣と物を害ん人これと皆心利を嗜て
一乃一いつて瘡を舐り癰を吮一乃一いつて蠶小答
一乃一いつて一祖法柱か一乃一いつて命を奸は徒の氣
一乃一いつて人少むのち却て富を厚く人南
宋正字を偽字より奸邪は君子より思一乃一いつて人
一乃一いつて

○ 謝肇淛曰渡江以北諸民無不往泰山者其齊戒
盛服虔心一志禱祠以畢下山舍逆旅則用齊宰

殺狼籍醉舞喧呶宴童歌倡無不狎矣夫既不能
脩善於平生而亦不能敬謹於事後則其齊戒不
過以欺神明耳云々

按吾國近日之俗無貴無賤詣伊勢皇太神宮
亦不異江北上泰山之俗嗚呼東西異地然愚
俗之情一飯

○林道春曰文武娶淡海公長女藤原夫人生聖武聖武
亦娶淡海公少女光明后淡海公之於文武聖武猶
如事代主之於神武綏靖也夫神武綏靖時世草
昧禮法未備乎不比等者制律令頒諸州後世推
之以為大臣之隆盛使妻于二帝是獨何哉不能

無嫌疑者欽云々

愚按是見系譜雜錄而未考續紀等之日記之
言也不比等元正帝養老四年庚申薨而後神
龜甲子聖武即位天平元年己巳光明子立后
以此觀之公薨十年之後聖武無道而娶從母
欽於公何嫌疑之在且上古之事猶闕畧有名
同而人異者有數世同号者也然敏達天武以
妹姪為后當時無疑之者聖武亦以從母為后
不疑焉流風當世如此耶嗚呼

○外宮五神四座之秘

神宮秘傳問答曰問曰瓊々杵尊外宮御座其

説如何答曰國常立尊ハ御正体ニテ瓊々杵尊ハ
高貴神ノ勅ニ依テ東ノ相殿ニテ御座也瓊々杵尊
ニソヒ奉リテ天兒屋命天太玉命モ西相殿トシテ御
同殿ニ御座瓊々杵尊ノ恙魂ヲ天上玉杵尊ト申
テ瓊々杵尊ト同シ御船代ニ一座ニシテ御神体ノ御
形ニ躰御座スコレヲ五神四座秘事トイフト云々

○今世兒乃乃ぬむせしむ神ノ勅ニ依テ東ノ相殿ニテ御座也瓊々杵尊ト申
テ瓊々杵尊ト同シ御船代ニ一座ニシテ御神体ノ御
形ニ躰御座スコレヲ五神四座秘事トイフト云々
○今世兒乃乃ぬむせしむ神ノ勅ニ依テ東ノ相殿ニテ御座也瓊々杵尊ト申
テ瓊々杵尊ト同シ御船代ニ一座ニシテ御神体ノ御
形ニ躰御座スコレヲ五神四座秘事トイフト云々

水乃々々々漢ノ徳を來して是号とせ也

- 通鑑細目起首書初命晋大夫為諸候是周卷第
一義也名畧得其正則周室豈微弱讀者深玩之
- 學者欲觀中庸之書則須看近思存養一篇也
- 沈氏四聲韻譜曰平聲者衷而安上聲者勵而舉
去聲者清而遠入聲者直而促云々
- 五雜俎十曰今園中無花果清香而味亦佳也即
倦遊錄所謂木饅頭者也云々
- 秦始皇松を封して大夫と漢武帝ハ柏を封して大夫と
封して唐乃武后も松を封して大夫と封して五雜俎小
吾於延喜帝詔を五位より封して大夫と封して五雜俎小

其の感得よりわらうなり也真言家も醍醐流を用ひ侍らるる

○真言家より道士の術を学ばしむる亦我邦を信
仰家と混せし伊勢より信伊豆國より流布せし武
蔵國立川乃信陽沙の法を傳へしを亦新し
立川流と稱せし一室流抄より事より亦小
野乃文鏡の流もかゝる事と今亦此を神社乃
祠官を傳へて秘藏ししを亦し

○對馬國下縣郡阿麻氏留神社

山城國葛野郡天照御魂神社

是乃天照之神より天孫降臨乃時供奉乃神

天日神命也

壹岐國月讀神社

山城國葛野月讀神社

是亦月讀より天孫供奉乃月神也
淡路乃社司紀如尚之説也名乃月讀
附云々事如也

○朱子山北紀行大賢遊覽之與感慨之心祭於言
亦人其性情之心学者所須玩焉

○陳了翁責江文進學徒義虛中克己之意實可以
為後世師法

○程子曰君貴明不貴察臣貴正不貴權

大八洲オホヤシロ

明のけい一統の歴代乃溢を奉る時瓊の杵を音
火の出見ざる昔不念の二代をりて迄く盤余彦尊より
とめて溢年を撰とるの應あり我國乃應事の
とるよ人の尋ね

○ 経書に應神天皇乃時韓より奉りて甲子に神武
天皇より次々十有二月乃角もつらき一於も周の代
も何れも夏止を用ひたれり亦故あり神皇正統
人先出出をきりし也

○ 古之欲明明徳於天下者云々

伏按に齊家治國平天下の皆民を新すりの也

於るの章句より下乃人にして皆以て明徳を
明るる事ありて宣つ何や也一此経
文に古昔大皇帝一人を敬信したる所の備為
乃方を孔子奉て人より一也一也一也一也
人何乃人と古乃人君政教乃責を任して下
乃衣食を足し大皇帝を信兆乃妙なりと
下乃人をして皆理を究め公を西りて其を備め
人を治むる要道となし一也一也一也一也
明るる事と欲するに朱子乃序と或何とを照
し看て此理を知りて清朝日誦解義此を意を
明るる学者宜しく参考せよ

按續日本紀國分寺号金光明四天王護國寺
國分尼寺号法花滅罪寺

○島羽院天永年中六十餘州被定天永寺尾張天
永寺春日井郡味饒村護國院也美濃天永寺賀
兒郡細目村東光寺也今在大梁村

○^蜜罍 日本紀曰垂仁天皇三年春三月新羅王
子天日槍未飯註曰天日槍自菟道河泝北入近
江國吾名邑暫住云云是近江國鏡谷陶人則天
日槍之後人也云云

凡我邦陶蜜蓋始於日槍又土部職亦在同紀
而書野見宿祢改本姓謂土部臣之由矣然後

僧行基為蜜罍至今稱行基燒磁罍有人間亦
茶壺之類本邦以藤四郎所陶者為佳高藤四
郎入異邦習陶蜜之法尾州之人也然不知何
時人也夫我邦以磁罍都未曰瀨戶物按瀨戶
者海邊之名也我尾南知多郡處有古蜜之
蹤而近海濱於此瀨戶始為陶罍而後移北地
欽今春日井郡呼瀨戶之地者非海邊是依旧
地稱瀨戶村乎

